様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ５ 月 ２７ 日現在

機関番号：８６１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３２４９

研究課題名（和文）近現代移住漁民による技術移動と都市部への定住に関する民俗学的研究

研究課題名（英文）Folklore study on technology migration and settlement in urban areas by modern migrant fishermen

研究代表者
磯本　宏紀（Isomoto, Hironori）

徳島県立博物館・その他部局等・学芸係長

研究者番号：５０３７２２３０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、さまざまな漁法を駆使し、移動し、主に都市部に定着した漁民集団を対象にし、その実態と構造の解明を行った。対象とした漁民集団は、堂浦一本釣り漁民、伊島潜水器漁民、以西底びき網漁民、カツオ・マグロ沖合・遠洋漁民である。
漁民集団の移動は、当初戦略的に漁業を展開、拡大する方法として機能していたが、やがて、移動先に拠点を移し、定着していった。近現代における都市部への人口移動の一端を、漁業と漁民の生業展開から明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の研究は、全体として把握されにくい漁民集団の生業にもとづく移動と、その変遷、その構造について、事例研究から明らかにした。
広く捉えれば、それは、近現代における漁村部から都市部への人口移動の一端でもあった。漁業という生業として積極的に打ち出し、進出して発展させていった漁民の動向は、漁業の産業化の中で、漁港付近の都市住民として定着させ、定住させていく結果になった。
本研究の途上で、都市部の一角に、同郷出身者の居住地が点在することをしばしば補足する結果になった。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to elucidate the reality and structure of fishermen's groups that have moved and made use of various fishing methods, mainly in urban areas. The target fishermen groups are the Dounoura one-line fishing fishermen, the Isima dive fishermen, fishermen of the Trawl Fishery operated
in the East China Sea and the Yellow Sea, and the Skipjack, tuna offshore and deep-sea fishermen. Initially, the movement of fishermen's groups functioned as a strategic way to expand and expand the fishery, but eventually they moved to a new location and became established.In modern, population migration to urban areas was clarified from the fishing industry and the livelihood development of fishermen.

研究分野：民俗学

キーワード：移動　移住　通漁　都市部　植民地期朝鮮　漁民

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

漁業史及び漁村構造について検討する場合、常に漁民やそれに伴う技術、伝承文化の移動性を考慮に入れておく必要がある。しかし、漁民移住史ともいえるこうした分野は、必ずしも全体像が解明されているとは言えないばかりか、基礎となる史資料の整備もいまだ十分であるとは言い難い。とくに、近現代資料については見過ごされてきたのが現状である。

ただ、人の移動、物質的移動等の事象を、実態に沿ったかたちで、より具体的に捉えようとする試みは、民俗学等においても、近年になって若干見られるようになった。自治体史（誌）や調査報告書等においても、移住やそれに伴う文化や技術の伝播が報告されるほか、実証研究にもとづいた理論の構築を試みた研究も提出されている。たとえば、野地恒有『移住漁民の民俗学的研究』（吉川弘文館，2001)、『漁民の世界―「海洋性」で見る日本』（講談社，2008）などでは、漁民による出漁地側と移住地側の関係を双方向的に捉え、民俗学における漁民移住の研究に大きな示唆を与えた。小島孝夫編『海の民俗文化－漁撈習俗の伝播に関する実証的研究－』（明石書店，2005）においては、多様な伝播の形態を抽出し、その上で伝播の概念設定と分析概念としての再定義を図っている。また、増﨑勝敏　2012「近海カツオ一本釣り漁船乗組員のライフヒストリー」『地域漁業研究』52-2 などは漁船乗組員個人の移動と労働の詳細について分析を行い、実態把握を行っている。

しかし、それぞれの研究は個別の研究視覚や資料にもとづき、漁民集団の移動の実態や文化伝播等について明らかにしているものの、現代の漁民による定住過程や、定着していく実態そのものについての検討や理論抽出には至っていない。そのため、比較研究にもとづく類型やその先の理論の構築が必要である。

２．研究の目的

移住する漁民集団の研究は、詳細を把握するにあたり、個別研究に重点がおかれてきた。比較研究からの類型化は、こうした調査研究の過程で、漁民集団が機械化した漁業を廃業した後、別業種へ転業し、同時に出身地に戻らず、出漁先に定着・定住していく過程についても個別事例として把握していたものの、これまでの研究において主目的としていなかったこともあり、十分な調査研究には至っていない。漁民の都市部定着・定住していった現象は、一次産業従事者の二次、三次産業への転換（サラリーマン化）と、都市部への人口集中をもたらしていった現象の一断面であると考える。そのため、こうした事例における歴史的変遷を丹念にひも解いていくことは、現代社会においても重要な課題である。

これまでの研究では、漁民集団の移動性やそれによる交流や伝播に対する研究に重点がおかれてきた。そのため、漁業を機械化させ、その技術にもとづいて別業種へ転業したり、漁業を廃業したりしていく過程、都市部への定着・定住の実態については十分に把握されていない。本研究の視覚はまさにそういった点の把握にある。同時にそれは、漁業者のサラリーマン化と都市部への人口集中の一因ともなった現象であると考える。本研究では、「漁業出漁→機械化→転業→都市部定住」といった変遷モデル（仮説）を設定し、それを検証するための調査研究を研究期間内に実施する。

漁民の出漁地への定住が生業とかかわるものだったのか、まったく異なるコミュニティを形成していったのか、他地域の漁民間、他の生業をもつ都市住民とのかかわりの把握から、漁民移住の特質とその類型、都市部への人口移動の実態と変遷について検討することも視野にいれる。

３．研究の方法

次の通り、調査、整理、分析を行った。

■次の①～⑤を主な調査対象として新たに資料（データ）を収集した。

①アワ船団船員に関する調査

明治中期以来、延縄漁、2 艘曳底曳網漁等の船員として、徳島県美波町、阿南市から漁業移住した船員らと、関連する漁業経営体を対象とした。これまでの調査研究をふまえ、長崎市および福岡市において対象者への聞き取り調査およびアンケート調査を実施した。また、廃業した漁業経営体（水産会社）等の経営関連資料（文献資料）の調査を行った。

②カツオ・マグロ船員の調査

大正期、昭和初期以降にカツオ・マグロ漁船の船頭、船員として、徳島県牟岐町、海陽町から漁業移住した船員らと、関連する漁業経営体を対象とした。これまでの調査研究をふまえ、神奈川県三浦市において対象者への聞き取り調査を実施した。また、漁業経営体の経営帳簿、個人の船員手帳、漁撈日誌等（文献資料）の調査を行った。

③潜水器採貝漁民の調査

明治期から昭和初期にかけて朝鮮出漁、昭和期から平成期にいたるまでヘルメット式潜水器を用いた潜水士として、徳島県阿南市伊島から移動した漁民および潜水士を対象とした。これまでの調査研究をふまえ、阪神地方の集住地（神戸市、岸和田市等）において対象者への聞き取り調査を実施した。また、廃業した漁業（潜水業）経営体等の経営関連資料（文献資料）の調査を行った。

④一本釣りおよびテグス商の調査

江戸時代中期以降昭和期にいたるまで、一本釣りおよびテグス行商として徳島県鳴門市から移動した漁民の足跡を追った。紀伊水道、瀬戸内海沿岸域の各地に出漁していたことは現時点で確認できるので、その出漁地において漁民の足跡をたどって聞き取り調査を実施した。あわせて、出身地である徳島県鳴門市でのテグス行商および生産に関する聞き取り調査を実施した。また、明治期から昭和初期の新聞広告等においてもテグス商の情報が蓄積されており、とくに徳島県においてこれらの文献資料の調査を実施した。

⑤水産史関連資料の調査

対象とする漁民は漁業技術の転換、発展（変化）にともない、漁法を転換させていった。主としてこうした動きや時代変化を把握するため、近代の漁業技術および漁法の開発や普及に関する水産史関連資料（文献資料）を調査した。

■調査により蓄積した資料の整理・分析を以下の方法によって行う。

①聞き取り調査およびアンケート調査による資料

ビデオカメラ、IC レコーダー等により動画データ、音声データおよび聞き書きによる文字データとして収集し、整理指標にもとづいてデータベース化し、比較研究に活用した。

②文献資料調査において収集した資料

文献資料の詳細調査にもとづき、データベース化し、比較研究に活用する。また、所有者等の許諾を得て可能な範囲で所属機関において博物館資料として収集、保管した。

③アンケート調査による資料

定量的データとして整理し、統計的に処理した。

④企画展の開催とその展示資料調査

本研究により得られた資料については、所属研究機関（徳島県立博物館）において同テーマによる企画展の実施を平成 30 年度に開催し、成果を公表した。

４．研究成果

研究計画で設定した都市部移住者の「漁業出漁→機械化→転業→都市部定住」といった変遷モデルについて、各事例の調査、分析を行った。総括的な成果として、2019 年に日本村落研究学会大会において「漁民移動と定住をめぐる段階性」として口頭発表し、これを発展させた内容の論文を投稿、2020 年 5 月現在査読中である。漁民の移動の特性、漁村部から都市部への移住、そしてその後の定住に至るまでの段階性について明らかにした。

また、2018 年には、アワ船団船員に関する事例研究、カツオ・マグロ船員の事例調査、潜水器漁民の事例研究、一本釣りおよびテグス商の事例研究に関連した企画展「阿波漁民ものがたり」を徳島県立博物館で開催し、一般市民を対象に公開した。なお、企画展については、2018 年に企画展図録「阿波漁民ものがたり」を研究代表者の所属機関である徳島県立博物館より発行した。

１）アワ船団船員に関する研究

2016 年に日本村落研究学会中国・四国地区研究会で、「以西底曳網漁業と漁民移住」として口頭発表、2017 年に地方史研究協議会大会で、「以西底曳網漁業と漁民の移住と定住化」として口頭発表した。口頭発表内容について、地方史研究協議会編『地方史研究協議会第 68 回（徳島）大会成果論集　徳島の発展の歴史的基盤―『地力』と地域社会―』において分担執筆した（2018 年）。

徳島県南部漁村域から移住した漁民が、福岡、長崎など都市部に移りすみ、以西底曳網漁業（大陸棚）での遠洋漁業の中心的な従事者となり、数世代にわたりかかわり続けた事例である。漁業出漁、移動を続けながら、漁船の動力化、機械化、大規模化が進み、拠点が都市部の大規模漁港へと移り、漁業と関連業種による産業化が進んだ。船主、船頭、船員等関係漁民らも都市部に移り住み、漁業と関わりながら定住していくことになった。時代の趨勢から、以西底曳網漁業はほとんど行われなくなったが、移り住んだ漁民らは都市部の住民として定住している。

２）一本釣りおよびテグス商の研究

2018 年に「阿波漁民の西行き―徳島県鳴門市瀬戸町堂浦から佐賀県唐津市呼子への漁民移住」として、『徳島地域文化研究』16 号に論文を発表した。一本釣り漁民の移動、定住事例を把握し、報告したものである。やはり漁村部から町への移動の事例である。

江戸時代以来の移動する釣り漁民の堂浦漁民に焦点をあて、その移動、通漁、移住実態について個別事例を集めた研究を進めた。漁具の伝播、変化、商品化の過程では、昭和期に発展したレジャー用釣り具との技術的系譜関係についての検討は、課題として残った。

３）潜水器漁民に関する研究

2016 年に国立歴史民俗博物館国際研究集会「近代における日本人の朝鮮出漁とその文化的影響」で、「瀬戸内漁民の朝鮮海出漁と技術移動」として口頭発表を行った。潜水器の技術（機械）を獲得、漁業で駆使することで漁場を広げ、移動し、定住していった事例である。後に、漁業から工事潜りへの転業者が増え、都市部に定着した漁民が多い。

ところで、潜水器の導入は、明治期から大正・昭和期にあたり、その時代性から、植民地期の朝鮮半島へ通漁、移住した例が多かった。こうした事例研究を進めながら、当初予定していなかった植民地期朝鮮での日本人漁業と技術移動、文化伝播に関する研究に展開していくことになった。

４）植民地期朝鮮への移動と漁業経営

2017 年に韓日学術交流研究共同研究会で「伊吹島と朝鮮海出漁」として口頭発表、2018 年に海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較共同研究会で「朝鮮海出漁の背景と植民地漁業経営」で口頭発表、2018 年に日本民俗学会談話会で「朝鮮海への日本人漁民の進出と漁業経営」として口頭発表した。潜水器の導入と運用に関する植民地期朝鮮への移動に着目する中で、派生的に研究を展開させた。香川県観音寺伊吹島の縛網漁、巾着網漁での朝鮮行き、広島県坂町横浜のイワシ船曳網とイリコ加工での朝鮮行きについて、事例研究を進め、成果を公表した。2020 年に「朝鮮植民地期の日本漁業経営の実態と展開」を論文として公開予定である。

出漁漁村に残された資料を集積した「徳島県漁村部に残る植民地期朝鮮への出漁・移住記録」を、2017 年に『生活文物研究』33 号で報告を行った。2018 年には、「他地域への出漁漁民による奉納絵馬」を『民具マンスリー』51 巻 2 号で論文を発表した。

また、植民地期に朝鮮に移動した日本人、日本に移動した朝鮮人等を通じた文化伝播、現在までの連続性について「東シナ海における底びき網漁業と日本の食文化」として、韓国国立民俗博物館国際シンポジウム「近代東アジアの漁民文化とその展開」で口頭発表した。

５）本研究に付随した成果

本研究の画像資料収集の一環として、戦前期の絵はがきの収集を行った。本研究に直接かかわるもののほかにも各種のものが収集できた。それらについて、整理、分析を行った「明治・大正・昭和初期の絵はがきに見る阿波の『名所』」を、2020 年に『徳島地域文化研究』18 号に論文発表した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 51(2)
２．論文標題 他地域への出漁漁民による奉納絵馬	５．発行年 2018年
３．雑誌名 民具マンスリー	６．最初と最後の頁 1-7
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 16
２．論文標題 阿波漁民の西行き―徳島県鳴門市瀬戸町堂浦から佐賀県唐津市呼子町への漁民移住	５．発行年 2018年
３．雑誌名 徳島地域文化研究	６．最初と最後の頁 86-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 33
２．論文標題 徳島県漁村部に残る植民地期朝鮮への出漁・移住記録―碑文・人物像・絵馬―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 生活文物研究	６．最初と最後の頁 85-121
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 18
２．論文標題 明治・大正・昭和初期の絵葉書に見る阿波の「名所」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 徳島地域文化研究	６．最初と最後の頁 22-44
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 磯本宏紀	４．巻 221
２．論文標題 朝鮮植民地期の日本漁業経営の実態と展開―香川県観音寺伊吹島、広島県坂町横浜出身の漁業経営者を対象として	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国立歴史民俗博物館研究報告	６．最初と最後の頁 （掲載予定）
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計8件（うち招待講演　2件／うち国際学会　5件）

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 朝鮮海への日本人漁民の進出と漁業経営―香川県観音寺市伊吹島と広島県坂町横浜の出漁漁民の事例から―
３．学会等名 日本民俗学会談話会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 以西底曳網漁業と漁民の移住と定住化
３．学会等名 地方史研究協議会
４．発表年 2017年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 伊吹島と朝鮮海出漁
３．学会等名 韓日学術交流研究共同研究会（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 朝鮮海出漁の背景と植民地漁業経営
３．学会等名 海の生産と信仰・儀礼をめぐる文化体系の日韓比較共同研究会（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 以西底曳網漁業と漁民の移住
３．学会等名 日本村落研究学会中国・四国地区研究会
４．発表年 2016年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 瀬戸内漁民の朝鮮海出漁と技術移動―潜水器漁民の事例を中心にして―
３．学会等名 国立歴史民俗博物館国際研究集会「近代における日本人の朝鮮出漁とその文化的影響」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2016年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 漁民移動と定住をめぐる段階性―阿波堂浦一本釣り漁民と九州・五島行き以西底曳網漁民の移動を事例として―
３．学会等名 日本村落研究学会大会テーマセッション
４．発表年 2019年

１．発表者名 磯本宏紀
２．発表標題 東シナ海における底びき網漁業と日本の食文化―グチをめぐる文化比較―
３．学会等名 韓国国立民俗博物館国際シンポジウム「近代東アジアの漁民文化とその展開」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計3件

１．著者名 地方史研究協議会編	４．発行年 2018年
２．出版社 雄山閣	５．総ページ数 315
３．書名 地方史研究協議会第68回（徳島）大会成果論集　徳島の発展の歴史的基盤―『地力』と地域社会―	

１．著者名 韓国国立民俗博物館編	４．発行年 2018年
２．出版社 韓国国立民俗博物館	５．総ページ数 495
３．書名 韓日海洋民俗誌	

１．著者名 磯本宏紀	４．発行年 2018年
２．出版社 徳島県立博物館	５．総ページ数 94
３．書名 企画展図録　阿波漁民ものがたり―海を渡り歩いた漁師たちの5つの話―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考